



鳥羽湾を一望、樋の山を歩く

鳥羽市

市街地・樋の山

樋の山の標高は、わずか163メートルですが、山頂付近からの鳥羽湾の眺めはすばらしく、鳥羽十景の一つに数えられています。また、『樅ノ木は残った』『さぶ』などで知られる小説家・山本周五郎（1903～1967）の中編小説『扇野』の舞台にもなりました。

今回は、樋の山周辺をハイキング。道中には、織田 信長や豊臣 秀吉のもとで水軍大将として活躍し、鳥羽城を築いた九鬼 嘉隆ゆかりの寺社や、子どもも大人も楽しめるビオトープ「めだかの学校」などがあり、変化に富んだ散策が楽しめます。

取材・文…中村真由美

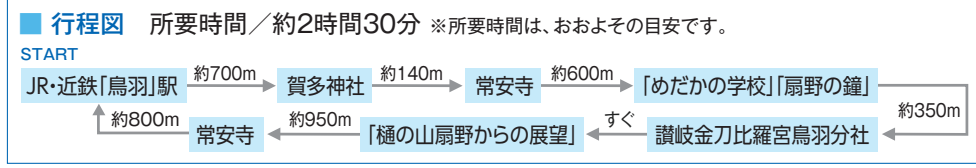
嘉隆ゆかりの賀多神社から常安寺へ

今回の散策は、JR・近鉄「鳥羽」駅から始まります。駅舎を後にしてレトロな商店などを眺めながら歩くと、やがて右手に見えてくるのが、賀多神社です。その歴史は古く、神亀元（724）年にまで遡るといわれます。

同神社には、戦国最強の水軍大将と称された九鬼 嘉隆にまつわる逸話が語り継がれています。それは、文禄元（1



賀多神社



“九鬼の千本杉”

592年の朝鮮出兵に向けて「日本丸（当初の名前は鬼宿）」を造船した際、同神社のご神木を使用したことから、報恩のために境内に千本の杉を植えたというもの。鳥居脇にそびえ立つ杉の大木は、九鬼の千本杉の中で唯一現存するものだといわれます。

なお、毎年4月に行われる「鳥羽春祭り」では、県指定文化財の組み立て式能舞台で薪能が演じられ、見る者を幽玄の世界へと誘います。

賀多神社にお参りした後は、九鬼家の菩提寺、常安寺へ向かいます。同寺の本堂横から裏側へと続く坂道を進むと、重厚な門構えの廟所が出現。廟所内

には一族の五輪塔が整然と並びます。中央が嘉隆、その向かって左側が息子の守隆の墓碑です。2基の墓碑は、静寂に包まれた廟所で、穏やかに昔語りをしているようにも見えました。



常安寺



九鬼一族の墓碑が並ぶ廟所



讃岐金刀比羅宮鳥羽分社



「樋の山扇野からの展望」

鳥羽湾の景観を堪能

「扇野の鐘」からも鳥羽湾を一望することができ、鳥羽十景の一つ「樋の山扇野からの展望」を楽しめる場所を求めて、再び山頂へと歩きます。すると、やがて姿を現したのが、**讃岐金刀比羅宮鳥羽分社**です。同社は、香川県の金刀比羅宮の6分社の一つで、昭和31（1956）年に創始されました。以来、漁業関係者を含め、広く崇敬を集めています。

同分社に参拝した後、案内板に従っ

て東へ向けて進むと、急に視界が開け、鳥羽湾の光景が目に見え込んできます。ここからの光景が、鳥羽十景の一つ「樋の山扇野からの展望」です。空の青色と、濃い海の色が混然一体とする中に、答志島や坂手島、神島などがポカリポカリと浮かぶ光景を眺めていると、時の流れを忘れてしまいそうになります。山本周五郎も、こうした光景を目にしたのでしょうか。

輝く海の青さを満喫した後は、一旦、常安寺まで戻り、そのまま終点のJR・近鉄「鳥羽」駅へと帰りますが、ここで



「鳥羽マルシェ」と「ドルフィン広場」

寄り道したいスポットがあります。同駅の北口から徒歩2分程度の海沿いにある「鳥羽マルシェ」と隣接する「ドルフィン広場」です。前者で鳥羽産の海産物や農産物などを購入したり、後者に設置された東屋などでひとときを過ごせば、散策の思い出がさらに充実したものになることでしょう。

問「鳥羽ガイドボランティアの会」

（鳥羽市歴史文化ガイドボランティアセンター）火曜日休館

TEL 0599-12518255

癒しスポット「めだかの学校」と幸福を呼ぶ鐘「扇野の鐘」

九鬼家一族の墓碑に手を合わせた後は、樋の山の山頂をめざします。少し急な坂道を上り、山の中腹あたりまで進むと、大きな建物が現れました。旅館「**扇芳閣**」です。同館から5、6分程度進んだ先に広がるのが「めだかの学校」。約1300平方メートルの敷地には、クロメダカの群れが泳ぐ「めだか池」を



はじめとして、音楽を



クロメダカが泳ぐ「めだか池」

奏でる人形を3000点以上展示する「音楽人形館」などが揃います。これらを手掛けたのは、「扇芳閣」館主で同校長の谷口仙二さん。お話を伺うと、「きっかけは、メダカが棲めるきれいな自然環境を子どもたちに残してあげたいと思ったこと」という明るい言葉が返ってきました。谷口さんの想いが詰まった学校は、大人も子どもも楽しめる癒しスポットとして、今も進化を続けています。

この「めだかの学校」のすぐ近くには、小説『扇野』にちなんだ「扇野の鐘」が設置されています。絵師の栄三郎と芸妓おつるが織りなす物語が展開する小説の中で、おつるが樋の山の草原に扇を置くシーンが重要な役割を果たします。作者の山本周五郎が鳥羽を訪れたのは、昭和9（1934）年のことですが、『扇野』が発表されたのは、20年後のことでした。周五郎の心には、情緒あふれる鳥羽の街や樋の山の印象が、深く刻まれていたのでしょうか。



「扇野の鐘」